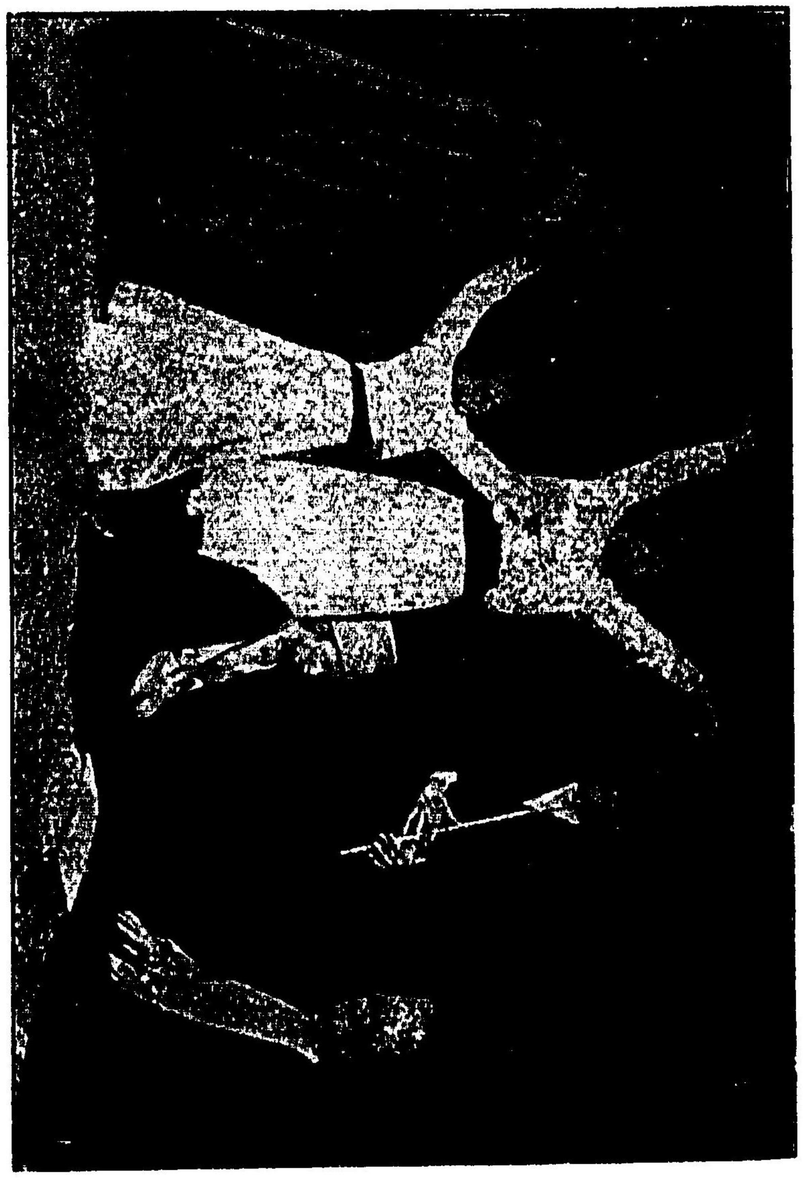
時に當りては其の眞價と勢力とは實に一世を風するに足りしならん然れども其教法の生氣は今や已に消磨し去り最早再興の見込めるなしサーウォルリアム、ムイアーが回々教を評せるの言に曰く

人或は回々教の革新改造を夢想するものあらん而して古來力を此業に竭せしもの屹々乎蓋せりと云ふ可し然れども事業常に悲慘の失敗を以て終りたり抑も、コーラン、は回々教を君主の律令と社會の法律との堅硬なる甲殼内に抱閉せり而して此の甲殼の餘り堅牢なるかため内部の發生を妨げ若し此の甲殼を破らば、コーラン、其物も破れさるを得ず蓋し改良されたる回々教は其の本質を失すべきを以て眞の回々教にあらさるべし(中略)改革家としての、マホメット、は或點にまで其の民人を改進せしものあり然れども豫言者としての、マホメット、は其民人をして未來永劫一定不變の一地に立たしめたり(中略)夫れ樹木の發生するは内部に存する萌芽の發生にして幾多の年



霜を沙り幾多の塞暑を經或は不時の天變に遭ふも日光に嘯し雨露に浴して其の枝葉日に繁茂するなり夫の固々數の如きは人爲の樹木にして毫も萠芽發生の天然力を有せざるを以て千二百有餘年の春秋を重ぬるも依然として當初之を植付けたる時と其形を改めず今之れを助長して其の發生を謀らん乎偶以て之れが存立を害するのみ

固々數の情態已に如此然らは則ち之れと離るへからさるの關係を有する國家にして同樣なる情態に陷らざらんと欲するも亦得べけんや德義を進め知識を開き其の他諸般の改善を圖る愚く「コーラン」を以て唯一本源とせり是を以て「コーラン」の研究は其力を用ひて餘遑なきも國民の敎育「コーラン」以外に出つるを許さず「コーラン」を祖述し「コーラン」を傳播する二の件個以外には國民を敎育し將た之れを先導するものなし國民が日々固陋の深淵に沈む安んぞ怪むに足らん若夫れ外國書

籍の如きは僧侶より選擧したる檢閲官の檢閲を經たるものに非ずんば嚴に其の輸入を禁ぜり君斯坦堡又はスミルナの如き大市都に於ても外國の書籍を販賣するの書肆は唯一二軒を見るのみ而して此等書籍迚も小說或は小說同樣の書類なるのみ余が見當りたる英書にして土耳古の歴史、政躰等の一斑を窺ふを得べき者は唯モレー氏著小亞細亞旅行案内の一書ありしのみ、旅行中余が携持したる書籍は數ピアストルを稅關吏に賂ふて君斯坦堡府の稅關を通過するを得しもスミルナの稅關にては不幸にして君斯坦堡より稅關監督官の來視中なりしを以て賄賂を行ふに由なく余が書籍は悉く沒收せられ悉く稅關に運去られたり然れども余は土耳古政府に依て書籍を沒收せらるゝの理由なきと信ぜしを以て其の理由を具し該市駐在英國事を經て談判の手續を爲し之れが爲め該市出發を二日間猶豫せしも當時は終に談判の要領を得る克はず數日前君斯坦堡府駐劄英國大使代理の通知に依り該書籍は終に該大使の斡旋に依り還附の運びに至りたるとを知れり而して書籍も終に亦た我手に還りたり此の一事に依りても讀者は土耳古官吏の素味なるを一驚するならん而して此等書籍にして直接に土耳古の事に關するものは只一冊のみにして其他は只間接に之れに關せしのみ其書名を擧ぐれば

近代智識に導く問題

カルソン卿著　波斯及波斯問題

キーン氏著　亞細亞

ニューマン博士著　パピロン及ニネベー

ウォルクス醫學士著　獅子及昇日の國(波斯)

如何にして近代の知識を土耳古に誘導すべきやとの問題は教育の企權を「コーラン」を師讀する僧侶より奪去りたる後初めて之れを開るを得べし是を以て土耳古の改良は波斯旅行記中波斯に就て陳述せる如く國家の政躰を根底より改革して全く回々教の範圍より脫却せしめ

回教徒迷信大なり

人種の不和

初めて之を爲すを得べし是れ蓋し可能而不可行の事に屬す何を以て之を言ふ曰く回々教徒の迷信實に大なればなり思ふに該教徒の迷信に熱き支那守舊黨の守舊に熱きに優ると萬々なり是を以て回々教國の改革に比すれば支那開發策の如きは比較的容易の問題と云ふて可なり往時隆盛を極めたる此等回々教諸大國が今や歐洲權謀世界の眺爭猜疑の結果に依り漸く其の存立を持續し得るは眞に憫むべきの至なり

土耳古の內憂は宗教の一事に止まらず帝國內に雜居せる數多人種の不和も亦紛擾の因たらずんばあらず亞細亞土耳古の諸地方に住する人種は土耳古人種「アルバニアン」人種「アラブ」人種「アルミニアン」人種「サーカシアン」人種「ジオルヂアン」人種希臘人種猶太人種「クルド」人種「ラヂ」人種「スラブ」人種「シリアン」人種「ウォラチ」人種及其他の人種なり如此幾多異人種の住居せる邦土に於て協同一致の幸福を得るを庶幾するは難事たらざるを得ず「チュラニアン」人種より出て今は希臘人種「アルミニアン」人種及其他征服されたる人種と混化せる土耳古人種は固より社會の上位を占む而して現時此等人種の本據は小亞細亞たり

土耳古人の本色

波斯人と土耳古人

小亞細亞は土耳古帝國存立の淵源にして經國の人物及財源之れより來り以て該帝國をしてバルカン半島に其立脚地を持續するを得せしめたり

故に土耳古人の本色はアナトリアに於て初めて克く之れを研究するを得べし抑も土耳古人の性たる卑直にして勇敢言に納にして行に果なり余は旅行中波斯及土耳古に於て余に伴隨したる從僕護身兵驅馬夫馬夫等に於て其の國民的性質を研究するを得以て旅中の一興となしたりしが凡て波斯人は其の行動粗朴なるも辯舌は機轉に富めり反之土耳古人は口舌圓滑ならざるも行動頗る迅速なり土耳古人は總して唯母國の語を解し得るのみ反之土耳古國內の他人種は總て幼年の

希臘人さアルミニヤ人

時より二三他國の語を解せざるはなし記者はスミルナ其他内地の市都に於て四五箇國の語に通する「アルミニア」人及び希臘人を見しは夢しとせず加之土耳古人は其性懶惰にして掛引其他計算上の習慣を欠き又其能力に乏し之が爲め對敵の人種をして土耳古國の貿易滿を斷せしむるに至れり而して其の優勢なるものは希臘人種及「アルミニア」人種なり希臘人種の敏捷にして猾智なる人生各種の業務に於て土耳古人を壓倒し夾の活潑にして起業の素に富める「アルミニア」人と共に内外の貿易は擧げて之れを其の掌中に收めたり「アルミニア」人種が貨財に富みたると西敎を奉ぜるとは終に異人種なる土耳古人の憎惡と排斥とを招き終に千八百九十年以來數度の無慘なる大虐殺の原由とはなりたり此等虐殺は西敎國の敵愾心を喚起し歐洲強國は此等虐殺に對し土耳古政府に向つて談判を開始したりし千八百九十年より千八百九十六年に至るまての年所に於て「アルミニア」人の虐殺された

るは其數約五十萬人に上り遭難者の遺産は國庫に沒收され若くは殺戮者の奪掠するところとなれり去れど之れが爲め「アルミニア」人種は決して勦絶さるゝことなく今尙ほ土耳古にありて貿易の各中心點に於て内地貿易の實權を握るものは「アルミニア」人種なり要するに數多人種中社交及商業の舞臺に立ちて其の特技を專らにするものは以上述べたる三人種のみにして此等人種はユーフレチース河及チグリス河々系地の南部及びシリアに住する亞剌比亞人種と共に亞細亞土耳古に於ては社會の重もなる要素と云ふて可なり人種の異同よりして風俗習慣も亦異同多し凡て土耳古人の風俗習慣は其隣邦波斯人の風俗習慣と甚だ異ならず獨り余が經驗に依るに土耳古人は外國人に對し自國の習慣を固守せず此點に於ては較寛大なるか如し假令は土耳古人は外國人と卓を同ふして食するも波斯人は之を肯せず土耳古人は外人をして其寺院に立入るを容るすも波斯に於ては此事甚だ難し

内地貿易

内地貿易は鐵路の設けなき地方にありては隊商に依りて行はれ而して貨物の運搬は驢馬若くは駱駝の背を借るなり抑も諸大帝國の起りたる邦土が天然の産物に富めるは言ふまでもなく土耳古政府にして此の非政なかりせはメソポタミアの原野のみにても數千萬人の生靈之れに生息するに足れり。スミルナの輸出貿易を一件せは如何にアナトリアが天賦の財源に饒かなるやを知るに餘あらん其の輸出貿易表載する所は玉蜀黍、米、其他の穀物、烟草、生絲、蘭、阿片、茜草、「ヴァロニア」(染料に用ゆる橡栗の一種)山羊毛、海綿、乾無花菓、乾葡萄等其種類實に饒多なり

旅行記の主要部

又乎余の旅行記も圖らず長文となりたるが余は記事中波斯及亞細亞土耳古に重きを置きたり是れ右二國は漫遊するもの稀にして世間其の事情に通するもの多からざるべしと思へばなり之に次て旅行したる埃及及印度の如き右二國に比しては世に知られたるの國なるを以て其の記事は可成之れを省略し旅行記の完結を急がんとす却説漁船「ダカリア」號はアレキサンドレタ港を發して後小亞細亞南岸の一港メルシナ及びレバノン山の麓に在るトリアポリスに寄港す偖トリアポリスよりベールートに至る航海中は左舷に神書地海岸の美麗なるとレバノン山脈の雪を戴けるとを認め觀目壯快を極めたり

航海

ベールート

ベールートはシリア國中最も有用なる海港にしてラス、ベールート及びセント、ダイミトリ二山の斜面に位し樹木鬱蒼たる公園と交りて遠望佳絶なり汽船碇泊中余は市街を散歩しながら民俗を窺はんとて上陸せり蓋市城の街路は狹隘にして例の如く不潔なるも蓋市城の周圍に建られたる新市街は外國人二千有餘の人口を有せるとのことなるが一見歐洲市都の風を存せり廣濶にして空氣も亦清眞なる街路の兩側には壯麗なる邸宅立併び柑、橘、無花果樹、棕梠等の諸樹之れを點綴して趣致眞に掬すべきを覺へたり却説ベールートを發し昔時に其名高かりしアヴェシヤ

シドン

ポートセヤド

ヒフョッド

殖民地のシドンに寄港し夫より西歩祖師聖生地ナザレスに僅に六時間駒行の距離なるハヤファー及びヤヤファーに寄港して昨年十二月十四日ポートセヤドに着せり最後に寄港したるヤヤファー港は聖地なるゼルサレム参詣者の輻湊地を以て有名なり該港よりゼルサレムまでは三時三十五分を費やし汽車にて至るを得べく又該港に輻湊する神聖地参詣者の数毎年一萬五千に超ゆると云ふ

却説ポートセヤドに於て孟買行汽船を待合はする時日を以て余はカイロ及ひヒーゼーの大尖塔を訪ぬるを得たり此の尖塔は紀元前約三千七百三十三年に於て全盛を極めたるヲオンス王の建立せるところにして高さ四百五十一呎、基礎の廣さ七百五十五呎あり、偖余は之れを一見したる時は別に其の偉大には驚かさりし、曾てマコーレー氏文章中那翁か此の尖塔を一見せし時、其の偉大を驚かざりしかど塔下に其軍を宿せしめ初めて其の偉大なるを覺とり此の尖塔に比しては翁の軍

梵の如何に小なりしかを驚けりとの事を記せるを讀みたり余は此の尖塔の攀登を試み初めて其の偉大なるとに驚きたり案内者たる三人の亞剌比亞人に助けられて余は石から石へと攀登れり否飛登れり此等の石は大小平均して約三呎の高さあり登攀中案内者は余に忠言するに下方を伏瞰すべからさるとを以てせり並し旅客の登塔する者下方を附瞰して眼目眩惑し爲めに感覺を失ひて生命の危險を招きたるもの時々ありたるによれり、頂點には約三十方呎の平面あり登攀の勞は之れに立ちて左右前後に包圍する陸上の景勝を眺望し初めて之れに酬ゆるを得べしカイロ府及ひモッカタン山は東方に横はりメンフカス及其尖塔を東南に望みサッラ及ひリビアの砂漠は遠く西方に界し、ナイル河は透迤として眼下の原野を流れ天の一方に蟠く、而して直下には夫の異形なる巨像(スフィンクス)の蹲踞するを見る偖尖塔を下り内部の塔房にとは入りたり、階段なき頗る滑かなる石灰石上を伏行して一大塔房

埃及博物館

カイロー

に入る房は尖塔の高さ四分一の處に在り廣さ約十二呎、内に赤色花崗石もて作りたるアロフス王の寶棺あり其形破れ果てゝ殘ひとてもなく其内部は定めて戰勝者たりし夫の亞剌比亞人若は波斯人の掠奪を經たるならん尖塔巨像（ピラミッドスフィンクス）も見物し終り夫より埃及博物館にとは向ひぬ館内最も余の注目を引きしはアオヂス、クムセス大帝其他歴史上著名なる貴人の木乃伊（ミイラ）なりき、其れより轉して紀元千百六十六年サラヂイン王がヤーゼー小尖塔の石材を以て築きたる天守閣、現「ケヂイブス」朝の商廛マホメット、アリの寺院（寺院の圓柱及ひ壁面は大理石を用ひぬ内部金碧燦爛たり）、モーゼスが埃及王女に依て拾上げられたりと傳ふるローダ島、墨女マリアがパレスタインより逃走の途次休息したりとの口碑ある紀元當初の物たる「コプチック」禮拜堂等を巡視したり、偖ナイル河の東岸に在るカイローは亞非利加洲中最大の市都にして五十萬以上の人口を有す千五百十七年に於てはセリム第一世之れを取り千七百九十八年に於ては那翁之れに大本營を置き、千八百〇六年に於てはマホメット、アリ之れに入る而して其近時の歴史は今更らに言ふまでもなし若夫れ市街の清潔と述作物の壯麗とを見ば「ケヂイブス」の王都は「スルタン」の首府に優れりと言はんのみ

孟買に向ふ

印度マルワ地方

却説埃及小旅行よりポートセヲドに歸り滊船「エヂプト」號に乘込み孟買に向ふ孟買にて又もや三井物産會社の厚意に依り之れに止宿す孟買にて孟買三井物産會社支店支配人間島君は印度旅行を余と共にするとなり終に其途に上りぬ

吾人は先つ夫のマルワ地方と稱せる兩片流田地の中心點なるインドール及ひウッーヂーンに至りぬ此等地方は半獨立として舊印度國の面影を留めぬれど實際の主權は全權の手を經て此等諸印度國を統御せる印度女皇に在ることは言までもなし却説ウッーヂーンより北方に進み印度の日光とも言ふべきアグラに至る蓋し印度旅行者にしてアグラ

シャー、ジャハン妃の廟

を知らざる者は印度を知らざる者と言ふべしアグラは「モーガル」諸王の榮へたる時に於て其の全盛を極たる市都にして現時殘留せる巧妙なる彫刻と建築物とは確かに創搬者の强大を示すに足る就中最も人目を引くはシャーヂャハンの妃の廟塋なる「タヂ、マハル」なりシャー、ジャハンは千六百三十年初めて此の廟塋の工を起し十七年を經て其工を竣へり、工事に費す所の費は三千萬「ルーピー」に上れりと云ふ偖此廟塋は高さ十八呎、面積三百十三呎の基礎を白色大理石もて獲ひたるものゝ上に立てり、四隅に高さ各百三十三呎の高塔屹立す、基礎上圓宇あり直徑五十八呎高さ八十呎圓宇中王妃及王の實棺を安置す、棺は白色大理石もて作りたる格子細工の塀を以て繞らせり、其形絶妙克く人心を感動するに足るへきもの世界上比類なかるべし、尖の圓宇の內部は四壁天上、多くは寶玉を鏤め、又光線の入り過きぬやう注意して之れを防きたれば之れが爲め一層美妙莊嚴を加へ其の趣味筆舌の盡すへき

ジャムナ右岸の城

所にあらず廟塋の周圍は園囿にして一線の河流之れを通過し二十有三の噴泉此の河流より激騰せり園中の花卉は其粹を集め大小の樹木も亦充滿せり此の園囿にして此の廟塋あり何境か奚を之れと闘はすを得ん廟塋全躰の雄大及其鈎合用材の色合ひは絶妙なる對比あると園內大小樹木の配置、及ひ清洌なる河流此等の諸物相湊合して人間稀れに見るを得るの壯觀を呈せり

「タヂャハル」廟塋に次て遊行するに足る場處はジャムナの右岸の高處に在る城にして城の周圍には廣さ三十呎深さ三十五呎の濠あり側面防禦は赤色砂岩石を以て之れを作り外觀頗る威儀を備へり城內には壯麗なる建物あり第一に吾人の眼に映したるは眞珠寺院なりし寺院はシャヂャハンの建立に係り外面は赤色砂岩石の背板を用ひ內部は白色、藍色、灰色の等花紋ある大理石を用ゆ構內に美麗なる中庭ありて中央に約卅七方呎の水溜あり中庭の東北及ひ南側は大理石の塀を繞

らし中央に洞門を穿つ寺院は三箇の圓頂を戴き三箇の殿堂より成立して七箇の廊道あり皆な中廊に通す、次に見たるはヂヤハン王の闕見室なり室の四柱は白色と金色との彩色を施したる赤色砂岩石にて作れり堂の西北端に當りて「ゼム」寺院と稱する白色大理石もて建てたる美麗なる小三圓頂寺院あり即ち宮女の寺院にしてシヤー、ヂヤハン王の建立に係る後ち王の皇子且王位の承繼者チーランクヤンは王の膳者を禁ずる爲め王を此寺院に幽閉せしが王は其の大建築物なる夫の「タヂマハル」廟堂を眺めて「ゼム」寺院の一室に於て逝けりと云ふ此寺院の下庭に廣き場所ありて往時此處にて象と虎の鬪爭を爲さしめたりしと云ふ尙ほ此れ等の外に許多の宮殿、寺院、公堂等ありて孰れも、ゆがル」人の技術に旅客の目を驚かさいるはなし

アグラより吾人は印度のメッカとも云ふべきベナレスに至れり、此處にて吾人は舟をカンヂス河に浮べて波羅門信者が此天河に於て水浴

するを見物したり此外火葬場、黃金殿、牛殿、猿殿等を見る時は如何なる程度まで波羅門教が隳落せしかを見るに足らん吾人は又サルナート即ち鹿野苑を訪へり鹿野苑は釋迦成道後初めて法輪を轉せしところなり後世の紀念として此處に佛塔建立せられしが其後幾多の盛衰を經過して今は其基礎のみ遺れり基礎は直徑約九十三呎、內外とも石にて疊み高さ四十三呎、石は皆鐵を以て蝎蝀（カスガイ）となせり然れども其の敗頹實に甚しく思ふに佛教衰退して今は此の遺跡を修復する程の信者此地に乏しきならん佛教なり耶蘇教なり孰れも其本國を去りて遠く外國に延蔓し本國は反て寂寥の感なくんはあらず

ベナレスを發しガヤバーベトナ等を經てカルカッタに著すガヤバーベトナは印度政廳阿片製造所所在地にして余が印度旅行の本務は重もに此等製造所の視察にてありき、印度の主都カルカッタにて余は開島氏に別れベンガル灣を渡りてラングーンに至る、ラングーンにて最も余

の感情を率きたるは憫然たる緬甸人の狀態にして其人種は我日本人と肖似せるにも係らず偏へに安逸を貪り敢爲の概なくして終に英國の臣妾となるに至れり

ランゲーンを發し新嘉坡、香港、汕頭廈門等に寄港し本年三月一日を以て當地に安着す

斯くて余の旅行に終りぬ今回の旅行間費すところの日子は二百八十九、跋渉したる旅程は二萬三千三百零五哩此内約二千哩は騎馬旅行とす而して其間經過したる邦國を擧ぐれば波斯、亞細亞土耳古、印度、埃及の一部及緬甸の一部なり遂是する地圖は(卷頭に載す)旅行の全程を示せり圖中の記號は旅行の諸方法即汽船、鐵路、車輛、騎馬等を示すもの也。

思ふに余が或は夫の亞剌比亞海の猛濤を渡り、或は南方波斯の恐るべき「ゴタル」を超へ或は炎天の下イランの高原を騎馬にて通過し或は月光に乘してエルビュルッ山を騎行し、或は江流を棧してトークス及びアンチトーラスを横きり、或は歴史上著名なるユーフレチース河、チグリス河、ナイル河、ガンヂス河等に臨み其間諸種の人種と交接し東方の書文明を目擊したる記事にして讀者の瀏覽に供するの價値ありたらんには眞に望外の幸なり若夫れ余の記事を讀者に紹介せられたるの厚意は之れを記者足下に謝せざるを得ず

西亞細亞旅行記 終

明治卅三年十二月十日印刷
明治卅三年十二月十三日發行

定價參拾錢

不許複製

著作者　臺灣臺北　家永豐吉

發行者　東京京橋區日吉町四番地　渡邊爲藏

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　青木弘

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

88
69

026806-000-1

88-69

西亜細亜旅行記

家永　豊吉／著

M33

ADD-0507